

殘花聚園 (四)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川謙

二六

三、貝原益軒の育兒意見(二)

益軒はその哲學說や倫理學說に於いてのやうに、幼兒教育の說に於いても、支那の儒教——別けても朱子の學說の忠良なる遵奉者であつた。朱子は大義名分の論を力瘤入れて説き立てもした。義のために身を捨つる覺悟の必要を説き奨めもした。然し世に有り餘る安價な悲歌慷慨の徒ではなかつた。熱意を包むに冷頭を以てし、情熱の迷るに任せないで知性の徐ろなる指圖を待つこゝつた風の人であつた。この點だけから見れば彼は、主知主義さへ見れば見られる學問を旨としたが、然し知ま行きが相伴ふこゝを豫定してゐたこゝを見落してはならない。そしてそれが、育兒上の意見に適用せられて、さてこそ益軒の說き現はれたのである。

「凡そ子を教ふるには、父母職にきびしければ、子たる者おそれ慎みて、親の教を聞きてそむかず。是を以て孝の

道行はる。父母やはらかにして嚴ならず、愛過ぐれば、子たる者父母を恐れずして、教行はれず、いましめを守らず。是を以て、父母を侮りて孝の道立たず。婦人又は愚なる人は、子を育つる道を知らず、常に子をおごらしめ、氣隨なるをいましめざる故、其おごり年の長するにしたがひていよく増す。凡夫は心くらくして、子に迷ひ、愛におぼれて、其子の惡しき事を知らず。古歌(藤原兼輔の作)に、

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふ道にまよひぬるかな。

こよめり。」

人の親の、子を思ふ心の闇の裏にこそ無限の愛が宿るのであらう。そこにこそ又、今日の我れ等が持つあさはかな「方法」を越えて、底知れぬ感化の力が湧き出づるのもあらう。然し、それをさうだま氣付き、さうだま主張するこ

さになるこゝ、その瞬間に於いて「心の闇」は、それが持つ自然の滋味が悉く流れ出てしまつて、救ひ難い悪魔の淵としてのみ残るであらう。故に教育しようとする意圖があり、よりよく教育しようとする念願があれば、結局「心の闇」の吟味を排撃さから出立して、一貫した指導の方針を求めなければならぬ。こゝに於いて知性の働きを要請する。「心の闇」の最も善き意味の、そして最も力強き代表者としての女性——母性に對抗して、これこそ戦ふものこれを斥けるものとしての知性、即ち父がなければならぬ益軒は考へた。戦ひ合ひ斥け合ふが故に、一方が悪で他方が善であるを考へられ易いが、益軒の真意はさうではない。さうし合ふことによつてのみ、眞に協力することの出来る情熱と知性との、不思議にも美しい、人間的な協力形態が成立するのである。朱子學派の知行併進説が、論理的に不徹底であるを非難せられる理由はこゝに存するが、それだけに人間的である實生活的である理由も亦、こゝに存する。

「小兒の時より、早く父母兄長に事へ、賓客に對して禮を勤め、讀書、手習、藝能を勤めまなびて、悪しき方に移るべきいごまなく苦勞さすべし。はかなき遊びにひまを費さしめて、ならはし悪しくすべからず。衣服、飲食、器物、居處、僕從に至るまで、其家の位よりまぎしく、ばうそく(貧しく且つ)不足勝ちの意にして、もてなしう

すく、心まゝならざるがよし。幼き時艱難に習へば、年たけて難苦に堪へやすく、忠孝の勤を苦まず、病少なく驕なくして、放逸ならず。能く家を保ちて、一生の間の幸多かり、後の樂多し。」

知行併進は、その哲學説の上に於いてのみではない、育兒上の意見にあつても同じである。「讀書・手習・藝能」の學習が結果するであらう内容上の知的效果と共に、學習することその事が味はせて呉れる體驗上の味得を「行」の生長のために期待するところ多かつた益軒であつた。

「幼き時より、必ずまづ其好むわざをえらぶべし。好む所尤(最大)事なり。姪慾の戲を好み、淫樂なごを好む事、又つひえ多き遊を、先づ早くいましむべし。是を好めば、其心必ず放逸になる。幼きより好めば、其心癖(こころぐせ)となり、一生其好みやまさるものなり。いかにいさげなくして、いまだ心に辨へなくとも、又富貴の家に生れ、萬の事心にかなへりとも、道に背き、人に害あり、物を苦め、財を費す戯れ遊のはかなきわざをばせざる、理なりと云ひ聞かせ、悟らしめてなれしむべからず。又我が身に用なき無益の藝を習はしむべからず。たさひ用ある藝能いへきも一向に好み過して、其事にのみ心を用ふれば、必ず其一事に心傾きて、萬事に通ぜず、其好む所につきて、ひが事多く害多し。

「行」を批判し吟味するものは知性であるが、行を成長させ進展させるものは「行」それ自らである。知は「行」に向つて、進むべき方向と方法を叫びては呉れるが、方向を決定するものも、その方向に向つて進發せしめるものも「行」それ自らである。故に幼い時から「行」を指導し「行」を批評して、「行」の行方を誘導し「行」の歩みを力強いものにするこゝは幼児養育の第一の仕事でなければならぬ。賤けを稱するものが、何よりも先づ大切なものに考へられたのはこの故である。「小兒の遊戯を好むは常の情なり」といつて、益軒は小兒の生活と遊戯とを切り離すこゝの出來ぬ一體さへ見立てたのであるが、この遊戯の選擇と指導とを重要視した理由も、こゝに發見するこゝが出来る。

更にまた益軒は、遊戯にしても藝能にしても、たゞへそれが有益であり興味あるものであつても、子供をして一方に偏し一事になづませてはならぬと考へた。一方的に子供の心を向けてしまふこゝは、結局心をのびくゞ發達させる途ではない。ヘルバルトの所謂多方興味の似た多邊的な興味を子供のために必要とした益軒であつた。それは物に捕はれ事に縛られた一方的な心さならないやうに、あらゆる物の上に、平等な理解と興味とを持ち得るすなほな心を育み上げやうとしたがためであつた。

「小兒の時、紙いかにのり、藁わらをあげ破魔弓はまゆみ(昔小兒の息災を祈るた

め正月室内に飾りたる弓矢、但しこゝは遊戯の具を射、豹をまわし、毬打の玉を打ち、てまりをつき、端午に旗人形を立つる、女兒の羽子をつき、天兒(あまがつ)、元來は兒女の災を移す呪なひに用ふる木偶のこゝ、但しこゝでは人形をいだき、雛をもてあそぶの類は、ただ幼き時好めるはかなき戯れにて、年漸く長じて後は、必ずするものなれば、心術に於て害なし。」

然し、いくら教育的な見地から幼児を見守るのださいつても、遊戯にふける子供を、一から十まで一々干渉してはならない。のびくゞ自由に遊ぶ自分の世界を樂しませるだけの雅量を持つて、子供に接しなければならぬ。子供の自由な樂しみを奪ふこゝを、賤けの仕事ださ考へる干渉好きの大人は、幼兒の眞の教育者ではなからう。

「凡そ小兒の善行あるこゝ、才能あるをほむべからず。ほむれば高慢になりて、心術をそこなひ、我が愚なるも不徳なるをも知らず。我に智ありし思ひ、我が才智にて事足りぬし思ひ、學問を好まず、人の教を求めず。もし、父として、愛に溺れて子の惡しきを知らず、性行よからざれども、君子のごさくほめ、才藝つたなければ、勝れたりさほむるは、愚にまよへるなり。其善を譽むれば其善を失ひ、其藝を譽むれば其藝を失ふ。必ず其子をほむる事なかれ。其子の害なるのみならず、人にも愚なり

「ご思はれて、いご口をし。」

干渉することを慎しまねばならぬとした益軒は、子供の行動を無闇に譽めたゞへることも、變形せられた一種の干渉で、すなほ、心の發達を妨害するものにして之をも斥けた。

「四民(士・農・工・商)ともに、其子の幼きより、父兄君長に事ふる禮儀作法を教へ、聖經を讀ましめ、仁義の道理を漸くささしむべし。是根本をつこむるなり。次に、ものかき算數を習はしむべし。武士の子には、學問のひまに、弓馬・劍戟・拳法なき習はしむべし。但一向に藝を好みすぎずべからず。必ず一事に心移りぬれば、其事におぼれて害となる。學問に志ある人も、藝を好み過せば、其方に心傾きて、學問すたる。學問は、專一ならざれば進み難し。」

かくて幼兒養育に關する益軒の結論を導き出すことが出來て、こゝに掲げたやうな簡單にして含蓄ある數言となつたのである。(昭和十四年二月十四日)

蘭

之れも誰れの好意か、私の机の上に、蘭の小鉢がきのふから置いてある。

細い短い葉の根に近く、二莖の花が、一つは蕾堅く、一つは軽くほゞけて、順々に香を立てやうとしてゐる。

何んといふ名か知らんし、何んと麗句で形容していゝか分らんが。

來る人毎にまあ／＼御らん下さいと言つて、さも私が蘭のあるじに似合はしいやうな顔をしてゐる。

(S.K)